

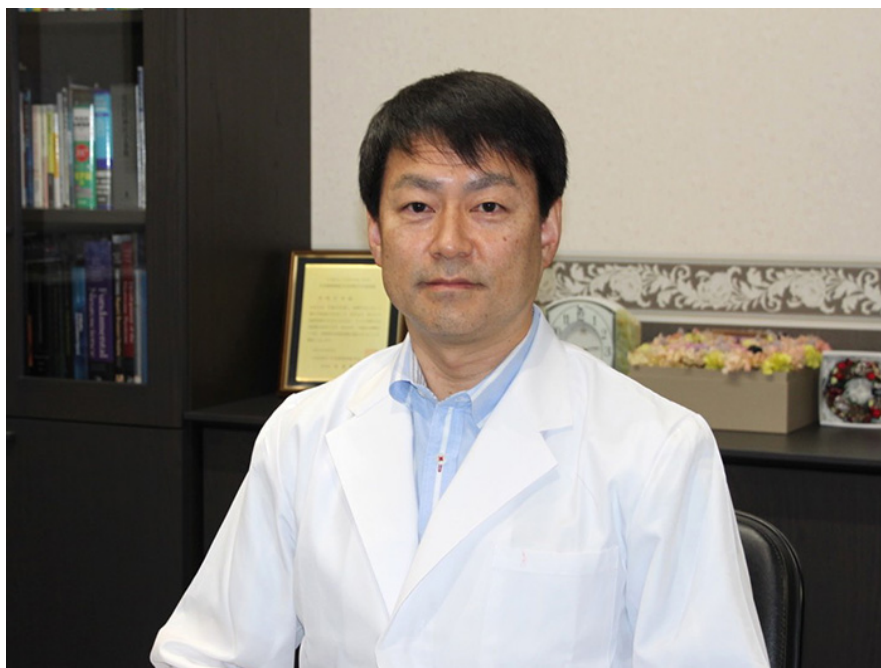
【鳥取】国立大初の児童・思春期病床「医師の育成進めたい」-岩田正明・鳥取大学医学部精神行動医学分野教授に聞く◆Vol.1

開設を自ら提案、教授就任後に実現のため奔走

2025年6月4日（水）配信 m3.com地域版

2025年4月1日、鳥取大学医学部附属病院（鳥取県米子市）に国立大では初となる「児童・思春期病床」（6床）が開設された。社会の複雑化に伴って心の問題を抱える子どもが増えている一方、対応できる医療機関は県内にわずか。「専門的に診療できる医師を育てたい」と開設を主動した精神科科長の岩田正明教授（精神行動医学分野）に、県内の医療状況と開設の経緯を聞いた。（2025年4月3日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



岩田正明氏（病院提供）

発達障害の子どもが増加、小中高校生の自殺も急増

——鳥取大学医学部附属病院は2025年4月1日、心の問題を抱える子どものための専用病床「児童・思春期病床」を開設しました。全国的にも珍しい取り組みだといいます。立ち上げた経緯をお聞かせください。

専用病床の開設・運営は、自治医科大学と岩手医科大学に続いて全国の大学では3例目、国立大では初めての取り組みとなります。

開設した理由は二つあり、一つが専門的な医師の育成、もう一つが専門的な治療・ケア・サポートができる環境の提供にあります。私は過去、米国のイエール大学に3年間留学をしており、帰国して母校に戻った2012年以降、子どもの心のケアの大切さが指摘されるようになりました。社会が複雑化して子どもが悩みを抱えやすくなっており、私の実感としても近年、発達障害の子が増えている印象を受けます。2022年に初めて500人を超えるなど、小中高校生の自殺者数が急増していることも大きな問題です。

その一方で、子どもに対応できる医療機関が県内にはとても少なく、受診したくても難しい状況が続いています。子どものこころ専門医、または児童精神科医として活動している先生のいる医療機関は、鳥取大学がある県西部の米子市に2カ所、中部の倉吉市に1カ所（現在は休止中）、東部に1、2カ所ありますが、いずれも大変混んでいると聞きます。

大学病院の強み生かし「専門の医師を自前で育てたい」

——児童精神科の領域はまだ歴史が新しく、担い手が少ないと聞きます。鳥取県でも診療と教育の受け皿が乏しい状況なのですね。

私の知るところでは、近隣で児童精神科の診療に注力している先生は東京大学や三重県の医療機関で研修を受けたと聞きます。現状、学びたいと思っても県外に出る必要があり、学んでも県内に活躍できる場所が少ないので戻りづらいんですね。だからこそ、「自前で医師を育てたい」と思い、2020年の教授選で専用病床の開設を表明し、2021年に教授に就任してから本格的に動いてきました。

教育自体は民間の医療機関でもできますが、大学病院のように患者数に対して医師数の多い施設の方が研修を行いやすいでしょう。病棟で指導医と専攻医が共に診療し、知識や技術の伝達を進める。カンファレンスを通して多職種の考えを学ぶ——。大学病院の強みを生かしていきたい思いがあります。

——構想にあたっては県外の事例を参考にしつつ、イメージを膨らましていったのでしょうか。

そうですね。各地にいらっしゃる専門の先生方に話を伺いました。富山大の辻井農亜先生、長崎大の熊崎博一先生、信州大の本田秀夫先生などです。信州大は2002年に国立大で初めて専門の部門「子どものこころ診療部」を開設したことで全国的にも知られており、病棟やカンファレンスの様子を見学させていただきました。ほかにも26床の専用病床を持つ鳥根県立こころの医療センターや、先ほど挙げた自治医科大が運営する「とちぎ子ども医療センター」の病棟も見せてもらいました。

こうした事例を参考にした結果、専用病床には一定のニーズがあると分かり、教育を兼ねる施設が少なくとも県に一つ、県の規模によってはそれ以上必要ではないかと考えています。

精神科病棟の3分の1を転用、県の事業も受託

——資料によると、精神科病棟のフロアの約3分の1を児童・思春期病床に転用したとあります。物理的・資金的なハードルはなかったのでしょうか。

物理的には、当院のこれまでの運営体制が好影響を及ぼしたと思います。当院の精神科には開放病棟と閉鎖病棟があり、開放病棟を改装して専用病床を開設したわけですが、この病棟はしばらく精神科では使っていなかったんですね。2020年から新型コロナウイルス感染症用の病棟として活用されており、同感染症が5類感染症に移行されたことを受け、2024年に精神科に戻りました。つまり、3年間は閉鎖病棟だけで精神科を運営していたので、かりに専用病床を開設しても培ってきたノウハウを生かせば問題ないだろうと判断しました。

資金面では、大学がおよそ3700万円をかけて改修しました。資金の捻出には、開放病棟を新型コロナ対策に使っていたことへの大学の配慮もあったかもしれません。私自身も病院長に何度も相談し、経営企画部や執行部の会議などに出席して話し合いました。

院外に向けては、鳥取県と協議を重ねて運営費の補助を受けることができました。不登校や発達障害の子どもの対策には地域との連携を含めた包括的な支援が重要です。そこで、病床内に支援チームをつくって県内の児童相談所や福祉施設の相談に対応し、助言や指導をしていくプランを提案しました。鳥取には県立の精神科病院がないため、行政が主動する事業を大学が代わりに推進していくイメージです。これは、「鳥取県こどもと親の心の健康サポート事業」として事業化され、大学が受託しました。今後、県と協力しながら具体化を進めていく予定です。



2025年4月に開設した児童・思春期病床（病院提供）

◆岩田 正明（いわた・まさあき）氏

2000年鳥取大学医学部卒。2006年同大大学院修了。イエール大学医学部分子精神医学部門への留学などを経て、2014年鳥取大学医学部精神科講師、2016年同学部精神行動医学分野准教授、2021年同分野教授。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

